

# 『ヘブリディーズ諸島旅日記』における ボズウェルとジョンソンの英語<sup>1)</sup>

Boswell and Johnson's English in *A Tour to the Hebrides*

市川 泰 男

## 要 旨

ジェイムズ・ボズウェルの『ヘブリディーズ諸島旅日記』にはジョンソン博士の会話・談話が多数記載されている。本稿は、ボズウェルが日誌をどのようにつけていたかを『旅日記』の中で見た上で、ボズウェルによるジョンソン博士の言葉の記述方法を分類した。記述方法は現代英語の直接話法と間接話法に近い型に分類できる。直接話法的なものは (A) 伝達動詞が明示されている場合と (B) 明示されていない場合に分類でき、(A) はさらに、伝達動詞が地の文中にある場合と、伝達動詞が引用符内の括弧の中にある場合と、引用符内に括弧無しで伝達動詞がある場合に分類できる。次にジョンソン博士の言葉が比較的忠実に記録されていると思われる引用符内の言葉に焦点を当てて、主に博士の『英語辞典』や現代語法との関連で検討して、200年以上前に話されたジョンソン博士の言葉、話し方の特徴などを多少明らかにした。

## キーワード

サミュエル・ジョンソン、ジェイムズ・ボズウェル、ヘブリディーズ諸島旅日記、話法、(S・ジョンソンの) 英語辞典

## 0. 緒 言

「以下の私の著作の独自の価値と私が考える特徴は、そこに含まれているジョンソンの会話の分量の大きさである。彼の談話が格別に教訓に富む楽しいものであることはあまねく万人の承認するところであ

り、以前私が或る機会に世に送ったその見本が世間から圧倒的な好評を得たことで、私は同じ性質の一段と広汎な報告の今回の企図に世間が必ずしも無関心ではなからうと信ずる十分な理由をもっている。』<sup>2)</sup>

「手には大きなイングランド製の櫛の杖を携えていた。ここまで細かく記したからといってお咎めなされるな。かくも偉大な人物にかかわる事柄はすべて観察に値するものだ。アダム・スミス博士がグラスゴー大学の修辞学講義で、ミルトンが留め金の代わりに靴紐を付けているのを知って愉快だったと話したことを私は覚えている。』<sup>3)</sup>

ジェイムズ・ボズウェルの *THE LIFE OF SAMUEL JOHNSON, LL.D.* (『サミュエル・ジョンソン伝』) が刊行されたのは1791年で、ボズウェルの *A TOUR TO THE HEBRIDES* (『ヘブリディーズ諸島旅日記』) が刊行されたのは1786年であることから、上記の最初の引用における「以前私が或る機会に世に送ったその見本」とは『ヘブリディーズ諸島旅日記』のことであると考えられる。二つ目の引用は、『ヘブリディーズ諸島旅日記』の前書きでのジョンソン博士の人となりを描写したあとの文言である。偉大な先人たちが、日々の生活でどのような考え方をしていたか、どのような癖を持っていたか、などが分かるのは面白い。この小論で取り上げるのは、このような興味・関心と軸を同じくするもので、特に、言語に焦点を当てたものである。『ヘブリディーズ諸島旅日記』にはジョンソンの言葉が多数記載されている。この言葉が、実際に、18世紀に生きたジョンソン博士の発した言葉であれば、それを知るだけで面白いと筆者は感じている。ジョンソン博士が発したと思われる言葉を見るのなら、『サミュエル・ジョンソン伝』を取り上げるべきだと思われるが、手始めに『ヘブリディーズ諸島旅日記』(以降『旅日記』)の言葉から見ていこう、と思った

次第である。もちろん、ジョンソン博士の発言として載っているすべての言葉が、実際に博士の口から発せられたということを証明することはできない。ジョンソンと旅をしたボズウェルがメモなどを参考にはしているが、ボズウェル自身の言葉で表現している、とみなすこともできよう。しかし、ボズウェルの記述の仕方はいくつかのパターンに分類できる。なぜいくつかの異なる記述方式がとられているのだろうか。もちろん、記述・描写の単調さを避けることにあった、と考えることもできる。しかし、ジョンソンの発した言葉のかなり正確な再現と、そうでない記憶を通してのボズウェル自身の言葉であるとみなされる部分に分けることができるのではないだろうか。本稿では、ボズウェルが用いた記述方法を分類し、ジョンソンの発した言葉がかなり忠実に反映されている部分はどのような記述に依るのかを検討し、その後でジョンソンの言葉を彼自身の『英語辞典』<sup>4)</sup>との関連などから総合的に考察したい。

## 1. ジョンソンの会話とボズウェルの日誌

ボズウェルによるジョンソンの言葉の記述方法の分類に入る前に、まず、ボズウェルがジョンソンの会話の記録に関してどのようなことを述べているかを見ておこう。

1. I did not begin to keep a regular full journal till some days after we had set out from Edinburgh; but I have luckily preserved a good many fragments of his *Memorabilia* from his very first evening in Scotland. (p. 174) (エジンバラを出発してから数日というもの、私は詳細な日誌をきちんとつけていなかったが、幸いなことに、スコットランドの初日の晩から私の記した「博士の言行録」の断片をかなり保存している。)<sup>5)</sup>

2. My Journal, from this day inclusive, was read by Dr. Johnson. (p. 196) (8月18日の注：この日からジョンソン博士が私の「日誌」に目を通した。)
3. I have not preserved, in my Journal, any of the conversation which passed between Dr. Johnson and Professor Shaw ; but I recollect Dr. Johnson said to me afterwards, 'I took much to Shaw.' (p. 203) (私はジョンソン博士とショー教授との間で交わされた会話は何一つ日誌に記していないが、後でジョンソン博士が「ショーがとても気に入ったよ」と私に言ったのは覚えている。)
4. I shall now mark some gleanings of Dr. Johnson's conversation. (p. 233) (ここでジョンソン博士の言葉の落穂拾いをしておこう。)
5. After this there was little conversation that deserves to be remembered. I shall therefore here again glean what I have omitted on former days. (p. 241) (これ以降は、記録に値する会話はほとんどなかった。そこで、私はこれまでに書き落としたものをここで再び拾い集めてみたい。)
6. I employed a part of the forenoon in writing this Journal. The rest of it was somewhat dreary, from the gloominess of the weather, and the uncertain state which we were in, as we could not tell but it might clear up every hour. (p. 262) (私は午前中の一部を費やしてこの日誌を書いた。午前のそれ以外の時間は、陰気な天気と何時晴れるかわからないとしか言いようのない判然としない状態にあったために、幾分陰鬱な気分であった。)
7. I felt a kind of lethargy of indolence. I did not exert myself to get Dr. Johnson to talk, that I might not have the labour of writing down his conversation. (p. 262) (私は怠惰から来る一種の無気力を感じ

た。ジョンソン博士の会話を書き留める面倒な仕事をしないで済むように、博士の口を開かせようという努力はしなかった。)

8. My survey of Rasay did not furnish much which can interest my readers; I shall therefore put into as short a compass as I can, the observations upon it, which I find registered in my journal. (p. 269) (私のラーセイ島踏破は読者諸賢にあまり興味を抱かせるものではなさそうなので、日誌に書き記してあるこの島に関する観察記録をできるだけ短く記すことにしよう。)
9. Let me now gather some gold dust, — some more fragments of Dr. Johnson's conversation, without regard to order of time. (p. 273) (ここで、いくばくかの貴重な金粉 —— ジョンソン博士の言葉のさらなる断片 —— を時間の前後に構わず集めておこう。)
10. It was a storm of wind and rain; so we could not set out. I wrote some of this Journal, and talked awhile with Dr. Johnson in his room, and passed the day, I cannot well say how, but very pleasantly. (p. 274) (風雨が強くて外出できなかった。私はこの「日誌」を少し書き足してからしばらくジョンソン博士の部屋で博士と話をし、何とはなしだがとても愉快に一日を過ごした。)
11. and I had endeavoured, in my journal, to state such particulars as might give some idea of it, and of the surrounding scenery; but from the great difficulty of describing visible objects, I found my account so unsatisfactory, that my readers would probably have exclaimed 'And write about it, *Goddess*, and about it;' and therefore I have omitted it. (p. 306) (そこで私もこの日誌に、神殿とその周囲の風景が分かる程度の細部を記そうと努めたが、明白な事柄を記述するのは結構難しくもあり、私の話は物足りないと自分自身でも思うので、読者

諸賢はおそらく、「それについて記せ、女神、それについて」と声高に叫ぶだろうから、この記述を省くことにした。)

12. He came to my room this morning before breakfast, to read my Journal, which he has done all along. He often before said, 'I take great delight in reading it.' To-day he said, 'You improve : it grows better and better.' (p. 311) (博士は今朝、朝食前に私の部屋にやって来て、私の「日誌」を読んだ。博士は旅の初めからずっとそうしていたのだった。博士は以前からしばしば、「これを読むのはとても楽しいよ」と言っていた。今日、博士は、「上達しているね、どんどんよくなっているよ」と言った。)

13. He asked me to-day, how it happened that we were so little together : I told him, my Journal took up much time. Yet, on reflection, it appeared strange to me, that although I will run from one end of London to another, to pass an hour with him, I should omit to seize any spare time to be in his company, when I am settled in the same house with him. But my Journal is really a task of much time and labour, and he forbids me to contract it. (p. 311) (今日、博士は私に、一緒にいる時間がこれほど少ないとはいったいどうしたことだね、と聞いてきたので、「日誌」にかなり時間がとられているのですと答えた。しかし、よく考えてみると、博士と一時間過ごすためなら私はロンドンの端から端まで走り回るのに、博士と同じ家にこうして落ち着いているときに、博士と同席する時間を捉え損なうなんて不思議なことに思われた。しかし、私の「日誌」は実際のところ多大な時間と労力のいる仕事であり、それを短縮するのを博士が私に禁じているのである。)

14. I must here glean some of his conversation at Ulinish, which I have omitted. (p. 326) (私は、ウリニッシュでの博士の言葉を省略してい

たので、ここでその幾つかを拾い集めておこう。)

15. He read to-night, to himself, as he sat in company, a great deal of my Journal, and said to me, 'The more I read of this, I think the more highly of you.' (p. 336) (博士は今夜は皆と一緒に座りながら、私の「日誌」をかなり読んで、「これを読めば読むほど君のことを高く評価するよ」と私に言った。)

16. As the gentlemen occupied the parlour, the ladies had no place to sit in, during the day, but Dr. Johnson's room. I had always some quiet time for writing in it, before he was up ; and, by degrees, I accustomed the ladies to let me sit in it after breakfast, at my Journal, without minding me. (p. 337)

(紳士たちが居間を占有したので、ジョンソン博士の部屋を除いて、婦人たちが日中居る場所がなかった。私はいつも博士が起きる前にそこでものを書く静かな時間を過ごしていた。そして、私は「日誌」を書くために朝食後私がそこに座るのを気にしないように婦人たちを徐々に慣らしていった。)

17. He said to-day, while reading my Journal, 'This will be a great treasure to us some years hence.' (p. 345) (博士は今日、私の「日誌」を読みながら、「これは数年経つと私たちの大切な宝となるだろう」と言った。)

18. I remember when he turned his cup at Aberbrothick, where we drank tea, he muttered, *Claudite jam rivus, pueri*. I must again and again apologize to fastidious readers, for recording such minute particulars. They prove the scrupulous fidelity of my Journal. Dr. Johnson said it was a very exact picture of a portion of his life. (p. 347) (私たちがアバープロシックでお茶を飲んでいたとき博士がカップを伏せて、ラテン語で「若者よ、さあ流れを閉じよ」と呟いたことを私は覚

えている。厳格な読者諸賢にはこのような微々たることを書き記す態度を幾重にも謝らなければならないが、これは私の日誌がいかに几帳面であるかを証明している。ジョンソン博士の言葉によると、私の日誌は博士の生活の一面を非常に正確に描写しているとのことだ。)

19. I rose, and wrote my Journal till about nine; and then went to Dr. Johnson, who sat up in bed and talked and laughed. (p. 352) (起床後、九時頃まで日誌を書いた。それからジョンソン博士の所に行くと、博士はベッドの上に起き上がって私と談笑した。)
20. There being little conversation to-night, I must endeavour to recollect what I may have omitted on former occasions. (p. 366) (今夜はほとんど会話がなかったので、過去に私が書き落としているかもしれない事を思い出してみなければならない。)
21. He read this day a good deal of my Journal, written in a small book with which he had supplied me, and was pleased, for he said, 'I wish thy books were twice as big.' He helped me to fill up blanks which I had left in first writing it, when I was not quite sure of what he had said, and he corrected any mistakes that I had made. (p. 367) (博士が私にくれた小さなノートに記した「日誌」を博士はかなり読み、喜んでくれた。博士は「君の記録はこの二倍あってもよかったね」と言った。博士が何を言ったか自信がないときに私がとりあえず残しておいた空白を博士は埋めてくれたり、私の間違いをすべて正したりしてくれた。)
22. The Sunday evening that we sat by ourselves at Aberdeen, I asked him several particulars of his life, from his early years, which he readily told me; and I wrote them down before him. This day I proceeded in my inquiries, also writing them in his presence



I have them on detached sheets. I shall collect authentic materials for The Life of SAMUEL JOHNSON, LL.D.; and, if I survive him, I shall be one who will most faithfully do honour to his memory. I have now a vast treasure of his conversation, at different times, since the year 1762, when I first obtained his acquaintance; and, by assiduous inquiry, I can make up for not knowing him sooner. (p. 370) (アバディーンで私たち二人だけで過ごした日曜日の夕方、私は博士に幼少の頃の生活について幾つか細かいことを尋ねた。博士はすぐに話してくれ、私は博士の面前で書き記した。私はそれを別々の紙に書き留めている。私は『ジョンソン伝』のための確かな材料を集めるつもりである。もし私が博士よりも長生きすれば博士の思い出を輝かしいものにするために誠心誠意努力するであろう。)

23. Let me now recollect whatever particulars I have omitted. (p. 371)  
(ここでこれまでに書き漏らした諸々について回想することをお許しいただきたい。)
24. The penurious gentleman of our acquaintance, formerly alluded to, afforded us a topick of conversation to-night. Dr. Johnson said, I ought to write down a collection of the instances of his narrowness, as they almost exceeded belief. (pp. 372-373) (以前にもそれとなく述べた知人のけち紳士のことが、今晚も話題に上った。ジョンソン博士は、私が彼のけちぶりをまとめて書き留めておくべきだ、それはほとんど信じがたいことだからね、と言った。)
25. Every particular concerning this island having been so well described by Dr. Johnson, it would be superfluous in me to present the publick with the observations that I made upon it, in my journal. (p. 378) (この島に関する詳細はジョンソン博士が実に見事に描写して

いるので、私がこの島で観察したことをこの日誌の中で世間に示すのは余計なことだろう。)

26. I remember but little of our conversation. (p. 393) (私たちがどんな会話を交わしたのかほとんど覚えていない。)

27. He is in excellent spirits, and I have a rich journal of his conversation. (p. 394) 〈ギャリック氏への手紙の中で〉(博士は上機嫌ですし、私は博士の言葉を大量に日記に書き留めています。)

28. I recollect very little of this night's conversation. I am sorry that indolence came upon me towards the conclusion of our journey, so that I did not write down what passed with the same assiduity as during the greatest part of it. (p. 403) (私はこの夜の会話についてほとんど思い出せない。旅も終わりに近づいて怠け心に襲われた結果、旅の間じゅう持っていたあの熱意で過ぎ去った出来事を書き記しておかなかったことを遺憾に思う。)

29. I recollect none of his conversation, except that, when talking of dress, he said, 'Sir, were I to have any thing fine, it should be very fine. Were I to wear a ring, it should not be a bauble, but a stone of great value. Were I to wear a laced or embroidered waistcoat, it should be very rich. I had once a very rich laced waistcoat, which I wore the first night of my tragedy.' (p. 407) (博士が言ったことで私が覚えているのは次のことだけである。服装について博士はこう述べた、「そうだね、上等なものが何でも手に入るのなら、本当に上等なものでなければならないね。指輪をはめるなら、安物じゃなくて高価な宝石でなければならない。レースか刺繍のついたチョッキを着るとしたら、非常に豪華なものでなければならない。私もかつては非常に豪華なレースのチョッキを持っていたことがあり、自分の悲劇が上演される初日

にそれを着て行ったものだよ。』)

30. Often must I have occasion to upbraid myself, that soon after our return to the main land, I allowed indolence to prevail over me so much, as to shrink from the labour of continuing my Journal with the same minuteness as before; sheltering myself in the thought, that we had done with the Hebrides; and not considering, that Dr. Johnson's *Memorabilia* were likely to be more valuable when we were restored to a more polished society. Much has thus been irrecoverably lost. (p. 414)

(私は本土に戻った直後から、以前ほど詳しく「日誌」を書き続ける煩わしさから尻込みしてしまい、その怠慢を自分に許してきたことでしばしば自らを叱らねばならなかった。「ヘブリディーズ諸島」が終わったという考えに逃げ込んでしまい、洗練された社会に戻ったときにこそジョンソン博士の「言行録」はもっと価値がありえるのだとは思わなかったのだ。かくして多くのことが失われ、今や取り戻す術もない。)

31. One of his objections to the authenticity of *Fingal*, during the conversation at Ulinish, is omitted in my Journal, but I perfectly recollect it. (p. 423) (ウリニッシュでの会話の中でジョンソン博士は、『フィンガル』の信憑性に異議を唱えたが、私の「日誌」には記していない。だが私はそれを完全に覚えている。)

32. From what has been recorded in this Journal, it may well be supposed that a variety of admirable conversation has been lost, by my neglect to preserve it.—I shall endeavour to recollect some of it, as well as I can. (p. 427) (私が記録を怠ったために、様々な貴重な発言がこの「日誌」から漏れてしまっていることは十分に考えられる。その幾つかをできる限り思い起こしてみよう。)

33. I begged of Dr. Blair to recollect what he could of the long conversation that passed between Dr. Johnson and him alone, this evening, and he obligingly wrote to me as follows : (p. 429) (私はブレア博士にこの晩ジョンソン博士と二人きりのときに交わした長い会話を思い出してくれるようお願いしたところ、親切にも次のような手紙を私によこしてくれた。)

34. I recollect no conversation of the next day, worth preserving, except one saying of Dr. Johnson, which will be a valuable text for many decent old dowagers, and other good company, in various circles, to descant upon. (p. 433) (翌日の会話で、次のジョンソン博士の言葉以外には記録に残す価値のあるものは何も思い出せない。それは様々な付き合いの場で、多くの身分の高い老貴婦人やその他の立派な方々が一席弁じる貴重な一節となるであろう。)

上記の引用から (A) ボズウェルは (観察記録などを含めて) 日々の日誌やジョンソン博士の言行録をつけていた : 1., 6., 8., 10., 11., 13., 16., 18., 19., 22., 24., 25., 27. (B) ジョンソン博士がボズウェルの日誌を読んで、修正や加筆を行っていた : 2., 12., 15., 17., 21. (C) ジョンソン博士の言葉の落ち穂拾い、または回想をしている : 4., 5., 9., 14., 20., 23., 32., 33. (D) 記録に値する会話を思い出せない、または会話を書き留める努力を怠った : 7., 26., 28., 30., 34. (E) 日誌には記入しなかったが、正確に覚えていることがあり、それを『旅日記』の中で記した : 3., 29., 31. ことなどが窺える。

『旅日記』全般を通して言えることは、ボズウェルがいろいろな話題を持ち出して、それに関するジョンソンの考え、意見を引き出し、それを几

帳面に日誌に記録しておき、それに基づいて一冊の旅日記にまとめたものが『旅日記』であり、その意図はボズウェルの次の言葉に集約されている。

35. I have only to add, that I shall ever reflect with great pleasure on a Tour, which has been the means of preserving so much of the enlightened and instructive conversation of one whose virtues will, I hope, ever be an object of imitation, and whose powers of mind were so extraordinary, that ages may revolve before such a man shall again appear. (p. 443) (一言付け加えておきたいのは、今後私はいつまでも大きな喜びをもってこの「旅」を思い出すであろうということであり、またこの「旅日記」が、その徳行が常に人々の鑑であり続けてほしい人物、さらにその智力があまりにも並外れているので、このような人物が再び現われるまでにはいくつもの時代が巡るであろうその人の見識と教訓に満ちた会話の多くを残すための手段であったということである。)

## 2. ボズウェルの表記方法 —— 話法

『旅日記』は「(ジョンソン博士の) 会話を多く残すための手段であった」とボズウェル自身が述べているように、ジョンソン博士が発した言葉の、上記 3. の 'I took much to Shaw.', 12. の 'I take great delight in reading it', 'You improve : it grows better and better.', 15. の 'The more I read of this, I think the more highly of you.', 17. の 'This will be a great treasure to us some years hence.', 21. の 'I wish thy books were twice as big.' など、短文でもあるので、実際にジョンソンが口にした言葉であるとみなしてよいだろう。同様に、次の36., 37., 38., 39., 40.にある 'Rascal', '(you) drunken dog', '(You) rogue', 'coxcomb', 'the devil' のような言葉も、実際にジョンソンが口にした言葉とみなしてよいだろうし、ジョンソン博士

がこのような言葉を発したと思うと、博士に親しみさえ覚える。

36. About eleven at night we arrived at Montrose. We found but a sorry inn, where I myself saw another waiter put a lump of sugar with his fingers into Dr. Johnson's lemonade, for which he called him 'Rascal!' (p. 204) (私たちは夜の十一時頃モントローズに着いた。粗末な宿しか見つからなかったが、そこでもまた私は給仕がジョンソン博士のレモネードに角砂糖を指でつまんで入れるのを目撃した。ジョンソン博士はこの給仕を「ごろつきめ」とどなりつけた。)

37. About one he came into my room, and accosted me, 'What, drunk yet?' — His tone of voice was not that of severe upbraiding; so I was relieved a little. 'Sir, said I, they kept me up.' He answered, 'No, you kept them up, you drunken dog:' — This he said with good-humoured *English* pleasantry. (p. 333) (一時頃博士が私の部屋に入ってきて、「何だ、まだ酔っているのかね」と声を掛けてきた。その口調は厳しい譴責調ではなかったので私は少しばかりほっとした。「先生（と、私は言った）、皆が私を寝かせてくれなかったのですよ。」「そうじゃない、君が皆を寝かせなかったんだろ、この飲んだくれが」とやり返した。これを博士は陽気なイギリス人的滑稽さを滲ませて言った。)

38. I told him, that I was diverted to hear all the people whom we had visited in our Tour, say '*Honest man!* He's pleased with every thing; he's always content!' — 'Little do they know,' said I. He laughed, and said, 'You rogue!' (p. 369) (私は旅行中に会った人たちが皆、「あの方はご立派な方だ。あらゆることに喜ばれ、いつも満ち足りておられる」と言うのを面白く聞いていた。私はそのことを博士に言って、「彼らはよく分かっていないのです」とも言った。博士は声を出して

笑って、「この悪党め」と応じた。）

39. Dr. Johnson said nothing at the time; but when we were in our post-chaise, told me, he thought Harris 'a coxcomb.' (p.416) (そのときジョンソン博士は何も言わなかったが、馬車に乗ってから、自分はハリスを「知ったかぶり」だと思っていると言った。)

ジョンソン博士が 'the devil' という一種の swearword (罵り語) を使ったという記録は特に面白く感じられる。

40. On Monday we had a dispute at the Captain's, whether sand-hills could be fixed down by art. Dr. Johnson said, 'How *the devil* can you do it?' but instantly corrected himself, 'How can you do it?' — I never before heard him use a phrase of that nature. (p. 366) (月曜日に私たちは大尉宅で、砂山が人の手で固定できるかどうか議論した。ジョンソン博士は「ばかったれ、できるもんか」と言ったが、すぐに「どうすればできるかね」と言い直した。私は博士がその種の言葉を使うのをそれまで聞いたことがなかった。)

ジョンソン博士の口から実際に発せられた言葉であるとみなせるだろうと判断した根拠は、単語であったり、短文であったりで、かなり正確に記録または記憶できる言葉であるだけでなく、例文が示しているように、すべて引用符を用いて記述されているという点にある。安藤貞雄 (2005) 708頁には「引用符は、1611年の欽定英訳聖書 (AV) にはなく、18世紀の小説にもない」という記述がある<sup>6)</sup>。しかし、1786年に刊行されたこの『旅日記』にはまさに現代の直接話法と間接話法と同じであるとみなせるような記述方法がとられている。以下、ボズウェルがジョンソン博士の言葉や会話を、どのように記しているかを見してみる。

最初に分類を示して、次にその根拠となる例文を示す。

1) 直接話法 (direct speech : 引用符がある場合)

A) 伝達動詞が明示されている場合

a) 伝達動詞が地の文章中にある場合 : (A-1) は動詞が say, (A-2) は say 以外の動詞

b) 引用符内の ( ) の中に伝達動詞がある場合 : (B-1) は動詞が say, (B-2) は say 以外の動詞

c) 引用符内に ( ) なしで伝達動詞がある場合 : (C-1) は動詞が say, (C-2) は say 以外の動詞

B) 伝達動詞が明示されていない場合 : (D-1) は—Johnson. (但し, —Johnson. の—が抜けている場合もある) (D-2) は直前の文から発言主が分かる場合 (D-3) は—で区切って対話を表す場合 (但しこの例は59で示す)

2) 間接話法 (indirect speech : 引用符が無い場合) (E-1) は動詞が say, (E-2) は say 以外の動詞

(A-1) 伝達動詞 (say) が地の文章中にある場合

41. Dr. Johnson appeared to day very weary of our present confined situation. He said, 'I want to be on the main land, and go on with existence. This is a waste of life.' (p. 358) (ジョンソン博士はこの缶詰状態にひどくうんざりしているようであった。博士は「本土へ戻って生活したい。これでは人生の無駄遣いだ」と言った。)

42. Dr. Johnson said, 'There is something noble in a young man's walking two hundred miles and back again, every year, for the sake of learning.' (p. 363) (ジョンソン博士は、「勉学のためとはいえ、若者が毎年二百マイルを徒歩で往復することは何とも言えぬ気高さがある」



と言った。)

(A-2) say 以外の伝達動詞が地の文章中にある場合

43. For, when I asked him, 'Would not you, sir, start as Mr. Garrick does, if you saw a ghost?' He answered, 'I hope not. If I did, I should frighten the ghost.' (p. 183) (ところが、私が博士に「先生、もし先生が幽霊をご覧になれば、ギャリック氏と同じようにギクリとしませんか」と尋ねたところ、博士はこう応じた、「そんなことはしたくないね。もし私がそんなことをすれば、幽霊の方をギクリとさせてしまうだろう。」)
44. Pursuing the subject, he said, the kennels of Southwark ran with blood two or three days in the week; that he was afraid there were slaughter-houses in more streets in London than one supposes; (speaking with a kind of horror of butchering;) and yet, he added, 'any of us would kill a cow rather than not have beef.' (p. 325) (この話題をさらに続けて、博士はサザークの溝は週に二、三日は血が流れていると、また、ロンドンには予想以上に多くの通りに屠殺場があるのではないかと思っている、と(屠殺をちょっと恐れているような口振りで)言った。そして、さらに、博士は「我々は誰でも、牛肉がなくなるよりも、牛を殺す方を選ぶだろう」と言った。)

(B-1) 引用符内の ( ) の中に伝達動詞 (say) がある場合

45. 'Nay (said Dr. Johnson) a man may write at any time, if he will set himself *doggedly* to it.' (p. 184) (「それは違う(と、ジョンソン博士は言った)、人はいついかなるときでも執筆できるだろう、断固として取り組みばね。」)
46. 'I inherited, (said he,) a vile melancholy from my father, which

has made me mad all my life, at least not sober.' (p. 302) (「私は (と 博士は言った), 父親のひどい憂鬱症を受け継いで, そのため生涯気も狂わんばかりでした。少なくとも正気ではなかった。)」

(B-2) 引用符内の ( ) の中に動詞 (say) 以外の伝達動詞がある場合

47. Dr. Johnson enforced the strict observance of Sunday. 'It should be different (he observed) from another day. People may walk, but not throw stones at birds. There may be relaxation, but there should be no levity.' (p. 202) (ジョンソン博士は安息日の厳守を強く主張した。「安息日は (と, 博士は述べた), 他の日とは異なるべきだ。散歩はしてもよいが, 鳥をめがけて石を投げてはいけない。寛ぎはあってもよいが, 軽率なことをしてはならない。)」

48. 'If, (he added,) God had never spoken figuratively, we might hold that he speaks literally, when he says, "This is my body."' (pp. 203-204) (「神が比喩的に話したことがなければ (と, 博士は付け加えた), 神が『これが私の身体である』と述べる時私たちは彼が文字通りに言っているとみなしてもよいだろう。)」

(C-1) 引用符内に ( ) なしで伝達動詞 (say) がある場合

49. One of the steeples, which he was told was in danger, he wished not to be taken down; 'for, said he, it may fall on some of the posterity of John Knox; and no great matter!' (p. 199) (尖塔の一つは危険な状態にあると言われたが, 博士はそれが取り崩されるのを望まなかった。「なぜなら (と, 博士は言った), それがジョン・ノックスの子孫の上に落ちてくるかもしれないしね。なに, 落ちててもたいしたことでは

ないがね。』)

50. 'Ay, said Dr. Johnson, fill him drunk again. Do it in the morning, that we may laugh at him all day. It is a poor thing for a fellow to get drunk at night, and skulk to bed, and let his friends have no sport.' (pp. 333-334) (「そう (と, ジョンソン博士は言った), また彼を酒びたりにしてやれ。朝から酔わせれば, 一日中彼を笑いものにすることができるだろう。宵のうちに酔っ払ってこっそりベッドに入り込み, 友人たちからかう楽しみを与えないのはつまらぬことだ。』)

(D-1) 伝達動詞が明示されないで, — Johnson. などで発言者を示している場合

51. — Johnson. 'Why, sir, what is commonly thought, I should take to be true. Your veal may be good; but that will only be an exception to the general opinion; not a proof against it.' (p. 179) (ジョンソン, 「ねえ君, 私は一般に考えられていることこそ真実であると思う。君たちの子牛肉はおいしいかもしれない。しかし, それは通説の例外にすぎないのだ。その反証ではなくてね。』)
52. — Johnson. 'No, sir! witchcraft had ceased; and therefore an act of parliament was passed to prevent persecution for what was not witchcraft. Why it ceased, we cannot tell, as we cannot tell the reason of many other things.' (p. 188) (ジョンソン, 「いや, 君, 妖術が絶えてしまっていたのだよ。だから, 妖術でないものを迫害することのないように議会法が可決されたのだ。なぜ妖術が絶えてしまったのか, 理由は分からない。理由を挙げるができないことは他にもたくさんあるがね。』)

(D-2) 直前の文から発言主が分かる場合

53. Sir William Forbes came to breakfast, and brought with him Dr. Blacklock, whom he introduced to Dr. Johnson, who received him with a most humane complacency; 'Dear Dr. Blacklock, I am glad to see you!' (p. 188) (サー・ウィリアム・フォースがブラックロック博士を伴って朝食にやって来て、彼をジョンソン博士に紹介した。博士は思い遣りをもって彼を丁重に迎えた。「ブラックロック博士、お目にかかれて嬉しいです。」)

54. Having expressed a desire to have an island like Inchkenneth, Dr. Johnson set himself to think what would be necessary for a man in such a situation. 'Sir, I should build me a fortification, if I came to live here; for, if you have it not, what should hinder a parcel of ruffians to land in the night, and carry off every thing you have in the house, which, in a remote country, would be more valuable than cows and sheep? add to all this the danger of having your throat cut' (p. 381) (ジョンソン博士はインチケネスのような島を所有したいという願望を口にしてから、本当にそのような状況になったら何が必要だろうか考え始めた。「君、私がここに住むようになったら、きっと要塞を作るだろう。要塞がなければ無法者の一団が夜間に上陸して、家の中の物をことごとく持ち去るのを防げないだろうからね。隔離した孤島では、家にあるものは牛や羊よりはるかに価値があるからね。さらに、喉を搔っ切られる危険も加わるしね。」)

(E-1) 動詞が say の場合

55. He said, he believed Burke was intended for the law; but either had not money enough to follow it, or had not diligence enough.

He said, he could not understand how a man could apply to one thing, and not to another. (p. 181) (ジョンソン博士が言うには、パークは法曹界を目指していたが、それを追求する十分な資金か勤勉さがなかったのだと思っているとのことだった。人がある方面に打ち込んで、別の方面に打ち込まないのはなぜなのか理解できない、と博士は言った。)

56. He always said, that he was not come to Scotland to see fine places, of which there were enough in England; but wild objects,—mountains,—waterfalls,—peculiar manners; in short, things which he had not seen before. (p. 230) (博士は、素晴らしい所を見るためにスコットランドに来たのではない、そんなものはイングランドにごまんとある、私は自然そのもの、山、滝、独特の風習など要するに今まで見たことのないものを見にきたのだ、と言い続けていた。)

(E-2) 動詞が say 以外の場合

57. Dr. Johnson observed, that there had been great disputes about the spelling of Shakspear's name; at last it was thought it would be settled by looking at the original copy of his will; but, upon examining it, he was found to have written it himself no less than three different ways. (p. 237) (ジョンソン博士が述べたところでは、シェイクスピアの名前の綴りについて大論争があり、最後は彼の遺言を見ることで決着するであろうと考えられたのだが、それを調べていくうちにシェイクスピア自身が三種類もの異なる綴りで自らの名前を書いていたことが分かったとのことであった。)
58. —Dr. Johnson remarked, that they who made this were not in the rudest state; for that it was more difficult to make it than to build a house; therefore certainly those who made it were in pos-

session of houses, and had this only as a hiding place. (p. 318) (ジョンソン博士は、これを造った者は未開の状態にあったのではない、なぜなら、それを造るのは家を建てるより難しいからであり、おそらく、それを造った者たちは家を所有していて、これをただの隠れ家として使ったのだろうと述べた。)

『旅日記』の中では、以上のような類型が様々な組み合わせられて記述されている。

例えば、次の文章は (E-1), (B-1), と一で区切って対話を示す (D-3) で記述されている。

59. George said that England had drained Ireland of fifty thousand pounds in specie, annually, for fifty years. 'How so, sir! (said Dr. Johnson,) you must have a very great trade?' 'No trade.' —'Very rich mines?' 'No mines.'— 'From whence, then, does all this money come?' 'Come! why out of the blood and bowels of the poor people of Ireland!' (p. 187) (ジョージがイングランドは五十年にわたりアイルランドから毎年正貨で五万ポンドを奪い取ったと述べたところ、「よくもまあそんなに (と、ジョンソン博士が言った)、あなたがたはとても盛大に商売しているに違いないですね。」「とんでもありません。」「とても豊かな鉱山でも。」「いえ鉱山なんかありません。」「では、どこからそんなお金が出てくるんですか。」「出てくるですって。貧乏なアイルランド人の血と腸からですよ。))

上記の分類に関してはさらに次のようなことが言える。

(A-1) に関しては41., 42. で見てきたような単純な型以外に Dr. John-

son, in very good humour, said (p. 200), he smiled and said (p. 205), he said, with complacency (p. 210), Dr. Johnson said calmly (p. 219), Dr. Johnson privately said to me (p. 234), he laughed, and said (p. 242), Dr. Johnson was so delighted with this scene, that said (p. 267), He was pleased with M'Queen, and said to me (p. 267), He smiled, and said (p. 281) he very good-naturedly said (p. 334), He laughed, and said (p. 369), He was irritated by this, and said (p. 371), he said to me, with a smile (p. 391), The Doctor grew warm, and said (p. 403), He answered with quick vivacity (p. 412), He said courteously (p. 415) He said one evening to me, in a fit of languor (p. 427) などに示されるように、発言するときの様子が記述されている場合がある。また、'Very well hit off' said he. (p. 195), 'Let's go in' said he. (p. 243) のように伝達節が非伝達節の後ろに来ることも、'No, Madam,' said he, with a tone of surprise and anger (p. 391) のように後置の伝達動詞に修飾語句が付く場合もある。さらに注意すべきは、次の例文が示すように、伝達動詞の後に間接話法であるかのように従位接続詞の *that* が置かれていて、その後引用符がある場合があることである<sup>7)</sup>。

60. Dr. Johnson, on the other hand, said to me more rationally, that 'it did not strike *him* as any thing extraordinary; because he knew, here was a large sum of money expended in building a fort; here was a regiment. If there had been less than what we found, it would have surprized him.' (pp. 239-240) (ところが、ジョンソン博士はもっと理性的で、「自分には別に驚くべきものという印象はなかった。ここでは砦を建設するのに多額なお金が費やされているのだし、ここに連隊があることは知っていたからね。私たちが見たものがこれほど多くなかった

ら驚いただろうがね」と私に言った。)

61. On our expressing some surprise at this, he said, that, 'when he lodged in the Temple, and had no regular system of life, he had fasted for two days at a time, during which he had gone about visiting, though not at the hours of dinner or supper; that he had drunk tea, but eaten no bread; that this was no intentional fasting, but happened just in the course of a literary life.' (pp. 350-351)  
(私たちがこのことに驚きを見せると、博士は、「テンブルに住んでいて不規則な生活をしていた頃は二日間何も口にしないことがあったよ。その間にもあちこち人を訪ねたものだ。正餐や夕食の時間は外してね。お茶は飲んだがパンは食べなかった。これは意図的な断食ではなく、筆一本で生活していた頃に起こったことにすぎない」と言った。)

62. He said, with a smile, that 'he wondered that the phrase of *unnatural* rebellion should be so much used, for that all rebellion was natural to man.' (p. 426) (ジョンソン博士は、すべての反乱は人間にとって自然なものなのに、不自然な反乱という言葉がこれほど多く使われているのには驚くよ、と微笑を浮かべながら言い切った。)

(A-1) の型でありながら、伝達動詞の後に従属接続詞の *that* がある場合には、引用符の中の代名詞に注意する必要がある。現代の直接話法なら *that* は不要であり、引用符の中で、60. の *him* は *me*, 60., 61., 62. の *he* は *I* になるはずである。

(A-2) に関しては、*say* 以外の伝達動詞として *add*, *answer*, *mention*, *explain*, *observe*, *call (to me)*, *broke forth*, *burst out*, *proceeded*, *remark*, *urge*, *reply*, *shew (ed)*, *told*, (疑問文で) *ask* が伝達動詞として用いられている。なお、*concluding with these words:*, *character-*



ized him thus : などの後に発話を引用符に入れている場合もある。(B-1) に関しては, 45. で (said Dr. Johnson), 46. で (said he.) の例を見てきたが, said he の後にコンマ (,) が入れてない場合や (he said) になっている場合もある。主語が Dr. Johnson の場合も (said Dr. Johnson.) のようにコンマを入れてある場合の方が多く, また, (said Dr. Johnson jocularly to Principal Robertson) (p. 185), (said Dr. Johnson, interrupting me.) (p. 345), (said Dr. Johnson, smiling.) (p. 356) のように, 発言するときの状況や言い方を説明している場合もある。(B-2) に関しては, observe, add が用いられている。なお, 48. に示されているように, 引用の中の引用符はダブル (“ ”) が用いられている。この点も, 現代の(英)の引用符の使い方と同じである。(C-1) は(B-1)に準じるが, 用いられている数は10を超えていない。(C-2) では reply だけが用いられている。ジョンソンの言葉を引用する仕方としては(D-1)が一番多く, 引用符の中の I はジョンソンを表している。(E-1) に関しては, 55., 56. で示したように従属接続詞の that がある場合とない場合があるが, 動詞が said の場合は that がない方が多い。(E-2) では own, tell, mention, observe, remark, ask, doubt などの動詞が使われている。

引用符が用いられていない, いわゆる間接話法での記述がある一方で, 引用符で括っている直接話法的な記述が用いられているので, 引用符の中の言葉は, 特に短い文などは, 実際にジョンソンが発した言葉であろうと推測してよいと思われる。しかし, 引用符の中が長く複雑な構文の場合は, 実際に発せられた言葉かどうか断言できないかもしれない。それに次のような例に見られるように, 引用符の中の文でもボズウェルの言葉に直して伝えられているのではないかと思われる場合があるからである。

63. Blacklock seemed to be much surprized, when Dr. Johnson

said, 'it was easier to him to write poetry than to compose his Dictionary. His mind was less on the stretch in doing the one than the other. Besides; composing a Dictionary requires books and a desk : you can make a poem walking in the fields, or lying in bed.'— (p. 188) (ジョンソン博士が「『辞典』を作るよりも詩を書くことの方が自分にとっては易しかったです。辞典より詩を書く方が緊張しませんでした。そのうえ、辞典を作るには書物や机が必要です。詩は野原を歩きながら、あるいはベッドに横になりながら作ることができます」と言ったとき、ブラックロックは大いに驚いた様子であった。)

64. Dr. Johnson observed, how helpless a man would be, were he travelling here alone, and should meet with an accident; and said, 'he longed to get to *a country of saddles and bridles*' (p. 375) (ジョンソン博士は、当地で旅をしていて万一事故にでも遭ったら人は何と無力なことだろうか、と述べ、「鞍と馬勒の国に行きたいものだ」と言った。)

63. の引用符の中の言葉が、実際にジョンソンの発した言葉を忠実に反映しているなら、つまり、現代の直接話法なら、to him ではなく、to me (または for me) に、そして His mind は My mind になるはずである。また、同様に、64. の例文では引用符内の he は I に、そして longed は long になるはずである。

先に見た 60., 61., 62. は (A-1) の型でありながら、間接話法のように that を従えている。上で見た 63., 64. は that を従えていない (A-1) であっても、引用符の中の he は I に、his は my に、him は me に置き換えて読まなければならない。従属接続詞 that のない (A-1) を (A-1 a), that のある (A-1) を (A-1 b) と区別するなら、(A-1 a) は先に

挙げた12., 15., 29. の例文に見られるように、引用符内の I は Dr. Johnson を表しているため現代の直接話法に近いと言えるが、63., 64. のようにボズウェルの言葉に直されている場合もある。つまり、(A-1) の型で、that があるかどうかの基準で、ジョンソンの言葉を直接伝えているかどうかの基準にはならない。ただ、(A-1 b) の方が形式的には間接話法に近い書き方であると言えるだろう。引用符の中に I が多く現れている (D-1) (D-2) の記述は、伝達動詞がないけれども、引用符の用いられ方は、ジョンソンの言葉をそのまま伝える直接話法に近いと言えるだろう。

(A-1 a), (A-1 b) の表現形式、(B-1), (C-1) (D-1) の表現形式は、できるだけジョンソンの言葉をそのまま伝えようとするボズウェルの工夫の結果であり、それらの表現方法は現代の話法に進化する前の段階であったと考えられるかもしれない。ボズウェルの『旅日記』はジョンソンの言葉をそのまま後世に伝えたという功績だけでなく、その記述の仕方を通して現代の話法にも少なからぬ影響を与えたと考えることができるだろう。

### 3. 引用符内の (ジョンソンが発した) 言葉の特徴

ボズウェルの記述方法は、現代の直接話法と間接話法に発展する前段階の記述方式であり、引用符内の言葉が必ずしもジョンソン博士が発した言葉そのままでない場合もあることが分かった。しかし、引用符内に書かれた言葉は、基本的にジョンソン博士が実際に発した言葉、当時の口語英語であるとみなして、以下、引用符に囲まれているジョンソン博士の言葉の特徴を見ていこう。

### 3.1 文 法

#### 3.1.1 倒置構文

##### 3.1.1.1 仮定法過去完了

仮定法過去完了の仮定を示す節内では if を用いる場合と、if を用いずに had + 主語の倒置形にする場合があることは言を俟たない。しかし、両者の違いを認める辞書と、両者が同じだとする辞書がある。例えば、CALED には 'Had is sometimes used instead of 'if' to begin a clause which refers to a situation that might have happened but did not. For example, the clause 'had he been elected' means the same as 'if he had been elected.' と記述されているのに対して、CALD には *FORMAL* Had I known (=If I had known), I would have come home sooner. のような例文で、Had + 主語の倒置形式の方が改まった言い方であると説明している。ジョンソンの言葉を見ると 65., 66 のような普通の if 節を用いる場合もあるが、『旅日記』でのジョンソンの言葉を見る限りでは、67., 68. のような had + 主語の倒置形の方が多く用いられている。

65. if he had learnt musick, he should have been afraid he would have done nothing else but play.<sup>8)</sup> (p. 372) (音楽を学んでいたら、演奏以外には何もしないのではないかという不安にかられたことだろう。)

66. Ay, sir, he replied; but how much worse would it have been, if we had been neglected? (p. 427) (そうなんだよ、君 (と博士は応じた)。でも、無視されたらもっと嫌だったろうな。)

67. And as to the savage and the London shopkeeper, I don't know but I might have taken the side of the savage equally, had any body else taken the side of the shopkeeper. (p. 211) (そして、野蠻人とロンドンの商店主については分からないが、誰か他の人が商店主の肩を

持ったなら、自分は野蛮人の肩を持ったかもしれない。)

68. Sir, had you gone on, I was thinking that I should have returned with you to Edinburgh, and then have parted from you, and never spoken to you more. (p. 253) (君ね、君が先にどんどん行っていたら、私はエジンバラまで君と一緒に引き返して、君と別れて二度と口を利くまいと考えていたよ。)

前者には If Lord Orrery had been rich, he would have been a very liberal patron. (p. 319) があるだけなのに、後者の例は、p. 211, p. 244, p. 307, p. 320, p. 344, p. 369, p. 389, p. 320, p. 344, p. 369, p. 389 などに見られる。

### 3. 1. 1. 2 仮定法過去

新英和大辞典では「(文語) では if を用いずに主語と (助) 動詞の語順を転倒して条件節を表すことがある」と説明したあとで、Were I (=If I were) in your place, I would help her. と Had I (=If I had) been there, I would have done it. の用例を挙げている。後者は上で見てきたところなので、were を用いた仮定法過去の例文をしてみる。『旅日記』では If I were の構文は、すべて転倒した構文になっている。

69. Were I studying here, I should go and take a lesson. (p. 201) (私がこの学生なら、彼に指導を受けに行くだろう)
70. Were I a chief, I would dress my servants better than myself, and knock a fellow down if he looked saucy to a Macdonald in rags : but I would not treat men as brutes. (p. 251) (私が族長なら、召使たちには自分よりもよい服を着せ、ほろを着たマクドナルド族の者に無礼なことを言う奴がいればそいつを殴り倒すだろうが、氏族民たちを畜生

のように扱ったりはしない。)

この転倒した構文の文は、他に p. 256, p. 407 などにも出てくる。

### 3. 1. 1. 3 目的語の前置

ジョンソンの言葉を見ていると、次の例が示すように目的語の前置が頻繁に行われている。

71. Now that you have a name, you must be careful to avoid many things, not bad in themselves, but which will lessen your character. This every man who has a name must observe. (p. 325) (君は今では名を成しているのだから、それ自体は悪いことでなくとも、君の品格を落とすような多くのことは避けるように注意しなくてはならないよ。名のある者はすべからくこのことを守るべきだ。)

72. But, to bind one's self to one man, or one set of men, (who may be right to-day and wrong to-morrow,) without any general preference of system, I must disapprove. (p. 182) (しかし、全般的な方針もなしに、(今日は正しいかもしれないが、明日は間違っているかもしれない) 一人の男またはある党の人たちに肩入れすることには賛成できない。)

71. では前述したことを指す *this* を前置していて、72. では重要な点を前置している。ただ、この不定詞の名詞的用法を *disapprove* の目的語とする用法は BNC には一つもない。目的語が前置されている例は、例文 51., 52., 67., 78. や、p. 364 などにもある。

### 3. 1. 1. 4 その他の構文

73. So desirous is he to talk, that, if one is speaking at this end of the table, he'll speak to somebody at the other end. (p. 180) (彼はと

『ヘブリディーズ諸島旅日記』におけるボズウェルとジョンソンの英語でもおしゃべりなので、誰かがテーブルのこちら側で話していても向こうの端の方から誰かに話しかけたりしかねないんだ。)

73. では so~that 構文の so desirous が前置されるのに伴って主語と動詞が転倒している。同じように, What foolish talking have we had! (p. 183) では感嘆文で助動詞と主語の倒置が起きている。

## 3.2 語 法

### 3.2.1 for と because

ジョンソンの『英語辞典』では, for と because は次のように定義されている。

For. *conj.* 1. The word by which the reason is given of something advanced before. 2. Because; on this account that.

Because. *Conjunct.* 1. For this reason that; on this account that; for this cause that.

現代の OALD では for *conj.* (old-fashioned or literary) used to introduce the reason for sth mentioned in the previous statement : because *conj.* for the reason that. となっている。

ジョンソンの言葉の中では, for は発言の根拠を示す74., 75. のような例文, または76. におけるようにセミコロンの後に用いられることが多い。because は主に77. のようにコンマのあとに用いて直接的な理由を示す場合が多いが, 78. のように, for の場合とほとんど同様にセミコロンのあとに用いられている場合もある。

74. (We talked of the ancient trial by duel. He did not think it so absurd as is generally supposed.) For (said he) it was only allowed when the question was *in equilibria*, as when one affirmed and another denied; and they had a notion that Providence would interfere in favour of him who was in the right. (p. 174) (昔の決闘による裁判の話になった。博士はそれが一般に思われているほど馬鹿げたものではないと考えた。)  
 (「なぜなら (と、博士は述べた), これは, 一方が肯定し他方が否定したために問題が平衡状態にあるような場合に限り許されていたし, 神が正しい者に味方して仲裁すると考える人もいたのだ。」)
75. (Emigration was at this time a common topick of discourse. Dr. Johnson regretted it as hurtful to human happiness. ) For (said he) it spreads mankind, which weakens the defence of a nation, and lessens the comfort of living. (p. 176) (当時は, 移民が広く話題になっていた。ジョンソン博士は移民を人間の幸福に有害なものとして遺憾に思っていた。「というのは (と、博士は言った), 移民は人を分散させることになるから, 国の防備を弱めてしまい快適な生活が損なわれてしまう。」)
76. I see you have not been well taught ; for you have not charity. (p. 329) (私は君たちがよい教導を受けていないことが分かるんだ。君たちには博愛心が見られないからね。)
77. Yes, said he; but it is because I am short-sighted, and afraid of bones, for which reason I am not fond of eating many kinds of fish, because I must use my fingers. (p. 296) (「そうだよ (と、博士は言った), 私は近視で骨が怖いからね。そんなわけでいろんな魚を食べるのが好きではないんだ, 手を使わなければならないからね。」)
78. I wonder however, that so many people have written, who might have let it alone. That people should endeavor to excel in conversa-



tion, I do not wonder; because in conversation praise is instantly reverberated. (p. 197) (しかし、よせばよいのに非常に多くの人がものを書いているのには驚きますよ。人々が会話に秀でよう努力することには驚きませんがね。会話では褒め言葉はすぐに褒め言葉となって戻ってきますからね。)

### 3.2.2 know not, have not

疑問詞節が前置される場合も含めて、疑問詞節を目的語とする場合、I know not が用いられている。

79. I could do all that can be done by patience : whether I should have strength enough, I know not. (p. 248) (我慢すればできることなら何でもできるさ、十分に体力があるかどうかは分からんがね。)

80. I know not who has confuted him to all *intents and purposes*. (p. 353) (どの点においても彼を論破したのがどこの誰だか私には分かりません。)

同様の例は、p. 186, p. 267, p. 367 にもあり、この他に they know not を含む文が p. 198, p. 231 に出てくる。

I don't know の形は例文67. に一つあるだけだが、他の動詞では現代の普通の否定形である I don't think so, I don't care how..., I don't believe it, I don't undertake などがある。その他には、Why don't we see...?, don't they see...? don't you perceive that...? などの疑問文と Don't let him go, Don't be ... などの否定の命令文の型で出てくるだけである。

短縮されていない do not ...の型としては I do not wonder/ approve, like, wish, find, remember, write, know, avail, believe, mean, for-

get, see, say, think, tell, talk, call, complain などが用いられている。過去形の did not は did not raise/ say, strike, use to, wish, pretend, think, wish, mean, say, know, venture などが出ているが、短縮形の didn't は用いられていない。否定の does not は20回出てくるが doesn't の短縮形は一度も出てこない。なお、以下のようないわゆる強調の do(es) が一度ある。

81. He must be a good tenant indeed, who will not fall behind in his rent, if his landlord will let him; and if he does fall behind, his landlord has him at his mercy. (p. 365) (地代を滞納しない者は確かによい小作人に違いないよ。たとえ地主が滞納を認めていてもね。現実には地主が遅れれば、地主は小作人を意のままにする。)

なお、know not と同様な型として have not が幾つか使われている。

82. We are not angry at a soldier's getting riches, because we see that he possesses qualities which we have not. (p. 381) (軍人が富を得ても私たちは怒りはしない。彼らが私たちにはない特質を持っているということを私たちが知っているからだ。)

83. Sir, I should build me a fortification, if I came to live here; for, if you have it not, what should hinder a parcel of ruffians to land in the night, and carry off every thing you have in the house, which, in a remote country, would be more valuable than cows and sheep? add to all this the danger of having your throat cut. (p. 381) (君、私がここに住むようになったら、きっと要塞を作るだろう。要塞がなければ無法者の一団が夜間に上陸して、家の中の物をことごと

とく持ち去るのを防げないだろうからね。隔絶した孤島では、家にあるものは牛や羊よりはるかに価値があるからね。さらに、喉を搔っ切られる危険も加わるしね。)

以上の他には I have no great patience to stay to hear the history of the M'Leans. (p. 371), They have not the means of raising more from their farms. (p. 357) が出てくるが、現代語法の do not have / don't have は出てこない。

所有を意味する have は 'Have you the *Idler*?' (p. 309) の疑問文が出てくるが、Did you have...? の型は出てこない。過去形の否定形 had not/ had no は、had not a better chance, had no money to study law, had not superior parts, had not the sense to see...の 4 例がある。

### 3.2.3 go and

LDOCE には “go and do sth also go do sth AmE [not in past tenses] to move to a particular place in order to do something : *Go wash your hands/ I went and spoke to the manager.*”, OALD には “In spoken English **go** can be used with **and** plus another verb to show purpose or to tell sb what to do : I'll go and answer the door.” の記述がある。go and do の言い方は、ジョンソンの時代から口語表現であったと考えられる。

84. But a man of any intellectual enjoyment will not easily go and immerse himself and his posterity for ages in barbarism. (p. 208) (しかし、知的な楽しみを享受している人なら、安易にアメリカに渡っていつまでも自分とその子孫を野蛮な生活に埋没させたくはないだろう。)
85. to go and see one druidical temple is only to see that it is nothing, for there is neither art nor power in it; and seeing one is quite

enough. (p. 243) (ドルイド神殿をわざわざ見に行っても、それがつまらないものだと分かるだけだ。そんなものには技術も力強さもないので一つ見れば十分だからね。)

上記の他には例文69. や p. 365, p. 382 などに見られる。

### 3. 2. 4 accustom oneself to do/ be accustomed to do

新英和大辞典には“accustom oneself to (doing) one's new work”, “I am accustomed to living [(まれ) to live] alone.”の用例がある。このように、現代英語では accustom oneself to / be accustomed to の後には不定詞でなく動名詞が来るのが普通であるが、ジョンソンの英語では不定詞が用いられている。

86. Warburton has accustomed himself to write letters just as he speaks, without thinking any more of what he throws out. ...' (p. 217) (ウォーバートンはふと口にするのをそれ以上は深く考えずに、話すのと同じ様に手紙に書くのに慣れてしまったのです。)

87. But, if a man is accustomed to compose slowly, and with difficulty, upon all occasions, there is danger that he may not compose at all, ... (p. 201) しかし、あらゆる場合にゆっくりとしかも苦勞して作文するのに慣れてしまうと、作文を全然しないようになる危険があります。)

その他の例は p. 313, p. 322にある。

### 3. 2. 5 そ の 他<sup>9)</sup>

現代の語法と異なる場合：It is being concentrated which produces high convenience. (p. 176) 現代英語では、it is ...that の構文で強調するところ

が、that の代わりに which が用いられている。例文15.にある、The more I read of this, I think the more highly of you. の後半部は現在なら the more highly I think of you. になるはずだ。difficulty に関しては、現代英語では have difficulty (in) doing の型になることが普通であるが、I have always difficulty to be patient when I hear authours gravely quoted... (p. 310) や the man with whom if you should quarrel, you would find the most difficulty how to abuse. (p. 224) のように不定詞や疑問詞句が続いている例もある。

現代英語では(古語)とみなせるような語としては、thy (例文21.), on't が there's an end on't; で2箇所 (p. 211, p. 222), Let's think no more on' t. が1箇所 (p. 254) に出てくる。また、ride hard a-hunting. (p. 330), fall a talking on the method (p. 345), fall a coughing (p. 347) のような表現も用いられている。'Tis low; 'tis conceit. (p. 179) における 'tis は OED では Abbreviation of *it is*, formerly common in prose, now *poet., arch., dial., or colloq.* と説明されている。if he does not know whither he is to go next (p. 276), he asked whither we were going (p. 350) における whither や 例文59. における whence など現代では(古語)とみなせるものだ。

綴りに関しては、次のような語が現代とは異なっている綴りが用いられている<sup>10)</sup>。

\*any body, \*any thing, \*Atlantick, \*buz<buzz> , colour, convenien-  
cy, cyder<cider>, defence, deposite, \*depeditation, \*develope, domes-  
tick, drest<dress 用例の中では dressed となっている。ジョンソンの言  
葉の中でも drest と dressed の両方が用いられている >, dutchess,  
\*epick<epic *adj.*>, \*every one, \*every thing, \*for ever, independant<見  
出し語は independent; それぞれ一度ずつ >, \*intirely<見出し語として in-  
tire はあるが intirely は無し。ジョンソンの言葉の中に intirely が一度あ

るがボズウェルは *entirely* を用いている >, \**judgement*<*judgment* が辞書の見出し, なお, 旅行記の中では *judgment* も使われている >, \**ministerially*<*ministerial* はあるが副詞形はなし >, *musick*, \**on't*, *pathetick*, *peregrinity* <*peregrine* はある; ジョンソンの造語 >, *pretence*, *publick*, *tragick*, *sarcastical*, \**satyrick*<*satirick*>, \**Shakspeare*, *splendour*, \**scoundrelism*<*scaundrel* はあるが *scoundrelism* は無し >, *shew*<*shew*. See *show*>, *shews* *shewed*, \**superior*<*superior*; ジョンソンの言葉の中に *superiour* が一回使われている他は *superior*; >, \**ser-jeant*<*sergeant*>, \**some thing*, *surprised*<*surprise* が見出し; 用例には *surprized* が出てくる; ジョンソンの言葉の中でも両者が一回ずつ > *topick*, \**taylor*<*tailor*>, \**unembodied*, *unchastity*, *to-day* (cf. 例文12., 13., 17., 41., 72.), *to-night*, *to-morrow*. 『英語辞典』には最後の3語は見出しに無く, To 項の語義番号25.に記載されている。

なお, *yesterday* は見出し語になっている。このように, 綴りが確定していなかったことが窺える。

### 3.3 成句・句動詞

成句としては, *on the contrary* (p. 214, p. 374), *contrary to ...* (p. 218); *into the bargain* (p. 185); *in proportion to* (p. 195), *in proportion as ...* (p. 312, p. 346), *got rid of* (p. 398), *take into the computation* (p. 295) などが用いられている。

句動詞に関しては, いくつかの動詞を『英語辞典』との関連で見てみる。

*keep* : Why, at least, does it not keep pace, in some measure, with the progress of time? (p. 189) この語義は *Pace* の項の 3. *degree of celerity*. To *keep pace*, is not to left behind. に相当。who are sufficient to keep up the credit of the school (p. 212) / To keep it up, it must be struck at both

ends. (p. 431)は To Keep の語義38. と39. の *To keep up* の語義に相当。  
could only keep playing awhile (p. 313) / who keeps his money (p. 231) /  
keep his money locked up for ever (p. 231) Let there be men to keep them  
clean(p. 256) / ...which you will keep in remembrance of me (p. 309) / to  
keep the publick in mind of him (p. 344) / keep his tenants in dependence  
(p. 365) は特に問題はない。Several of the members wished to keep you  
out. (p. 207), it is fixed that every man keeps to the right (p. 314) の To  
keep out, To keep to は『英語辞典』には句動詞としての見出しは無い。  
なお, to keep company with his father's mistress. (p. 319) は To keep の語  
義33. に To Keep company with. To have familiar intercourse がある。

lay: Cheyne has laid down a rule to himself on this subject (p. 259) にお  
ける lay down は, To lay の下位の 35., 36., 37., 38. のうちの語義38. に  
当てはまる例である。また, he laid hold of a little girl. (p. 214) は To LAY  
の語義42. にある To LAY hold of に該当する。その他に, taking up a thing  
and looking at it, and laying it down, and taking it up again. (p. 201) と  
Warburton had laid himself very open. (p. 217) は普通の To Lay のいずれ  
かの語義に当てはまる。

pick: I should as soon have thought of picking a pocket, as doing so. (p.  
252) / We have no occasion to go to a distance for what we can pick up  
under our feet. (p. 307) 最初の例は To Pick の語義7. To rob に該当する  
が, pick up は独立した句動詞として扱われていない。

afraid: (a) be afraid of doing sth, (b) be afraid of Noun, (c) be afraid  
to do, (d) be afraid (that) のように現代用法と同じであるが, (d) ではい  
ずれも that 無しの文である。

### 3.4 Johnsonese

新英和大辞典（研究社）によると、Johnsonese は「Dr. Johnson 流の文体（ラテン系の語を多用し、莊重・雄勁であると同時に重苦しいところのある文体）」と説明されている。本稿では、ジョンソン博士の当時の口語表現に見られる、ジョンソニーズの一端を示すと思われる言葉をひとつだけ挙げておく。

88. Take, as an instance, Charles the First's concessions to his parliament, which were greater and greater, in proportion as the parliament grew more insolent, and less deserving of trust. Had these concessions been related nakedly, without any detail of the circumstances which gradually led to them, they would not have been believed. (p. 389) (例えば、チャールズ一世の議会に対する譲歩を考えてみたまえ。議会が尊大になり信頼されなくなるにつれて、王の譲歩がますます大きくなった。そこに至るまでの状況について何ら詳しい記述もなく、王の譲歩だけがありのままに述べられていたら、そんな譲歩はとても信じられなかっただろう。)

このような文が実際にジョンソン博士の口から出てきているとなると、ジョンソン博士が書いた文章はさらに難解になることが考えられるだろう。

## 4. 結 語

ボズウェルがジョンソンの言葉を記録し、それをできるだけ正確に記述したことで、今に言う話法の確立にかなり寄与したと思われる点を見てきた。また、ジョンソンが話した言葉の中には、200年以上前にジョンソンが話した言葉だから、当然ながら、今とは異なる話し方があるのは理解で



きる。が、現代の英語にかなり近い言い方がされていることに気づきもする。『英語辞典』との関連で言えば、ジョンソンの言葉の中には、今風に言えば句動詞が頻繁に用いられ、しかもそれらが、『英語辞典』にかなり採用されて語義として記述されている。この句動詞を多く採り入れている点はジョンソン英語辞典の優れた点のひとつに挙げることができるだろう。

#### 注

- 1) 本稿は2009年、日本ジョンソンクラブの会合（アルカディア市ヶ谷私学会館）に於いて口頭発表した「ボズウェル『ヘブリディーズ諸島旅日記』におけるジョンソンの英語」に加筆修正を施したものである。
- 2) 『サミュエル・ジョンソン伝』5-6頁
- 3) 『ヘブリディーズ諸島旅日記』10頁
- 4) “A DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE” SAMUEL JOHNSON (Reprinted from the first edition (1755), in 1983, by Yushodo Press Ltd.
- 5) 日本語訳は『ヘブリディーズ諸島旅日記』中央大学人文科学研究所翻訳叢書2に依る。
- 6) Henry Fielding の “The History of Tom Jones, a Foundling” V2 (1749) p.9 には ‘Why, lookee, Sister,’ said Western, ‘I do believe you have as much as any Woman; ... : but come, Who is the Man?’ ‘Marry!’ said she. などから分かるように引用符は使われている。なお、この引用符は EVERY-MAN’S LIBRARY (No. 355) (1908) の版ではダブルの引用符 “...” になっている。
- 7) Talking of Phipps’s voyage to the North Pole, Dr. Johnson observed, that it ‘was conjectured that our former navigators...’ (p. 318) のように主語の後から引用符で括られている場合もあるが、これはミスプリントかもしれない。
- 8) 以下の用例はすべて引用符内の言葉であるので、(一部を除いて) 引用符は省略する。
- 9) 3.2.5 以降は紙面の制約上、断片的な記述になる。
- 10) \*は『英語辞典』に見出し語として載っていない語、< > 内の語は『英語辞典』での見出し語の綴り。

### 参考文献・辞書

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社
- 小島義朗 (1999) 『英語辞書の変遷』 研究社
- ジェイムズ・ボズウェル 『サミュエル・ジョンソン伝』 1～3. (1981-1983)  
中野好之訳 みすず書房
- 『ヘブリデーズ諸島旅日記』 (2010) 中央大学人文科学研究所翻訳叢書 2
- James Boswell, *The Journal of a Tour to the Hebrides with Samuel Johnson*, LL.D. (1786) LONDON
- Fielding, Henry. “The History of Tom Jones, a Foundling” V 2 (1749) (on Demand Printing)
- “TOM JONES” EVERYMAN'S LIBRARY No. 355 (1908)
- CAMBRIDGE ADVANCED LEARNER'S DICTIONARY (2003) Cambridge University Press (CALD)
- Collins Cobuild Advanced Learner's ENGLISH DICTIONARY (2003) COLLINS COBUILD (CALED)
- Johnson, Samuel (1755) *A Dictionary of the English Language*, Reprinted from the first edition (1755), in 1983, by Yushodo Press Ltd., Japan
- Johnson, Samuel (1755) *A Dictionary of the English Language*, on CD-ROM (1996). Edited by Anne McDermott, Cambridge University Press
- KENKYUSHA'S NEW ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY (2002) KENKYUSHA
- Longman Dictionary of Contemporary English (Fourth edition) (2005) LONGMAN
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English (Seventh edition) (2005) OXFORD
- Oxford English Dictionary Second Edition CD-ROM Version 3.1 (2002) Oxford University Press